

原始人 筒井康隆





原始人

筒井康隆

文藝春秋

原始人^{げんしじん}

昭和六十二年九月二十日 第一刷

定価 九五〇円

著者 筒井康隆

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(〇三)二六五―二二一

印刷所 大日本印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

©Yasutaka Tsutsui 1987

Printed in Japan

ISBN 4-16-309930-1

原始人／目次

原始人

5

アノミー都市

23

家具

43

おもての行列なんじゃいな

59

怒るな

75

他者と饒舌

89

抑止力としての十二使徒

105

読者罵倒

129

不良世界の神話

143

おれは裸だ

153

諸家寸話

181

筒井康隆のつくり方

191

屋根

217

装帧
山藤章二

原始人

原始人

彼は先太の疣^{いぼ}つき棍棒を老人の首筋に振りおろした。老人の頭部は地中にめりこみ、その胴体ははねあがり、足は天に向かつて一瞬、ほとんど直立した。

老人というのは彼が「片眼」として認識している老人であり、「片眼」はちょうど草を捜して頭を下げていたのだ。「片眼」は食べられる草のみ抜き、束にして左腕にかかえていて、そして彼は、それ以上片腕ではかかえきれぬほど大量の草を、ただ「片眼」から奪おうとしただけだ。彼はまだ若いので食べる草と食えない草の見わけがつかない。草をかかえたまままだ癢^{かゆ}痒^{かゆ}している「片眼」の腕から彼は草をもぎとる。「雑草」とか「野菜」とかの区別はなく、すべてはまだ「草」に過ぎない。「片眼」という認識にしても、「片眼」ということばがあるのではない。「眼」ということばさえなく、「眼」を表現するには自分の眼を指せばよい。「視力」と間違われる場合があるにしても。

「片眼」はまだ痙攣している。老人とはいえ、大きく上げた足のつけ根、内股の部分はやや病的に白っぽい。彼は欲情した。相手は男であり老人であり、今は屍体になりかかってもいるのだが、性の対象はまだ未分化だ。それでもさすがに片方の眼がかさぶたで覆われている老人の顔を見たりすれば欲望は萎える。さいわい「片眼」は俯せのままだ。彼はあたりを見まわしながら老人の内股を利用して手早く射精する。今殺したばかりのその老人が彼の実の父親であることなども、彼は知らない。「家」はもちろんのこと「家族」の觀念も彼にはない。彼にはまだ子供がいないのだ。

毒で夜なかに腹が痛くなつてのたうちまわる心配もなく、草がむさぼり食えるということは彼にとって喜ばしいことだ。しかし危険な山の中でひとり無防備に草を食うことはできないから、彼はいったん自分の洞窟へ帰ることにした。洞窟には「歯ぬけ」がいて草を半分食べるだろうが、しかたがない。「歯ぬけ」というのは彼よりたいぶ年長の女性で、もう四回も前から彼の洞窟に居ついている。彼にはすでに「歯ぬけ」と交わる気が少し以前から失せているのだが、ひとりになるとなんとなく淋しくなることを知っているし、やや威圧されそうな気配を伴った親近感も生じていて、追い出すことも殴り殺すこともできぬままだ。

あの「片眼」はほんとに片方の眼が見えなかったのか、と、彼は山を降りながらそんな知的な抽象的思考にふける。かさぶたがある方の眼は当然見えるまいと思っていたが、実はかさぶたのひび割れた隙間からなんとか前が見えていたのではあるまいか。ま、いいだろう。そん

なことを考える必要はない。考え過ぎるとすぐに頭が痛くなるから、「片眼」について考えることは損だ。「片眼」はもう死んだのだ。死ねばいなくなるのだ。事実その時すでに老人の屍体は狼の先祖二匹に食われつつあった。

考えながら歩いていたらため草をかかえていた左腕の力がゆるみ、灌木や岩に触れて大根の先祖だの葱の先祖の親戚だの、菠薐草の親戚の先祖だのが次つぎと脱け落ち、山麓まで来た時にはすでに半分がた落してきていることに彼は気づかない。そして今、彼は残りのすべての草を地面へ落してしまった。若い女を発見したのである。若い女を見るのは何カ月振りかであったが彼には月日という觀念がないので、いわば前の前の前の前のその前の遠くの前の前の前に見たといったところである。からだ全体は男同様、和毛に覆われているが、胸から腹にかけては無毛で肌がなま白い。きつと内股もまっ白なのであらう。彼はごく、と唾を呑む。

女たちは男に襲われるのを恐れて洞窟に隠れ、滅多に外へは出てこない。しかしその若い女はよほど腹が減っていたのであらう。梅の先祖の青い実を枝からもぎとっては次つぎと食べている。夢中であり、まだ彼には気がついていないようだ。気づかれていないのをさいわい、そして彼女に近寄る、などといった高等な知能が彼にはない。たちまち陰茎を勃起させ、先太の疣つき棍棒を振りかざし、下生えをおどり越えて彼は彼女に襲いかかった。「ぐお」

「ぎえ」と、若い女は叫ぶ。他人に助けを求めたり、相手の男をひるませたり、男に襲われるほど美しい自分であることを誇示したりするための高らかな悲鳴ではない。くぐもった叫びで

あり、それは真の恐怖と、警戒を怠ったことへの後悔の叫びである。殴り倒され、もしかすると死ぬかもしれないことを女は知っている。彼女は無毛の尻を見せて逃げはじめた。小便を洩らしている。

いかに女として力は強く、逃げる女をとり押さえ、地べたに押さえつけて犯すなどといった力業はこの時代の男ですら到底不可能だ。彼は追いつがって女の頭に棍棒を振りおろす。振りおろす時、彼は加減をした。突如として前の前の前の前のその前の遠くの前の前の前に女を襲った時のことを思い出したのである。棍棒に力をこめすぎて女はすぐ死んでしまったのだ。

もちろんその場で三度、四度と屍姦をしたのだったが、眼球が片方とび出している女の死に顔がせつかくの性交の気分を殺^たいだし、たとえ意識を失つていようとやはり時おり痙攣したりなどする生きた女の方が射精するには望ましい。せつかく美しい顔をしている女であつたのにと悔やむ気持が持続していたのだ。そうしたことを全部はつきり思い出したというのではない。ただ、思いきりぶん殴つてはそれに続く思う存分の快楽に支障があるぞという、高等動物らしい無意識からの抑止があつたのだ。

しかし女は昏倒した。四肢を引き攣らせ、顔を歪めている。また殺したかな、と、彼は思うが、今となってはそれを確かめていもしかたがないし、確かめる術も知らない。臉をこじあけてみる必要はない。白眼を剥いているからだ。もし殺したのであればせめて胴体に温もりがあるうちに、彼はあたりを見まわしてから大いそぎで彼女の下肢を、ほとんど水平に左右へ

開く。

小便で濡れて白い湯氣を立てている彼女の下腹部の膻外膻内を問わず、二度、三度とやたらに射精し終えてから確かめると、若いその女のからだにはまだ温もりがあった。かすかに呼吸もしているようだ。洞窟へ連れて帰ろう、と、彼は考えた。虫の息であろうと生きている限りは自分のあの快い射精の役に立つ。もし死んだらその時は屍体を捨てればよい。彼は女の伸び放題の髪をつかんで引きずり、歩きはじめた。実は「齒ぬけ」も、最初はそうやって洞窟へつれて帰ってきたのだったが、彼はそれを忘れていた。

食えるものを大量に、どこかへ抛ってきたようだ。それが草であったか木の実であったか、はつきりしない。捨てた場所もわからず、いつのことであったのかも思い出せない。前の前の前のことであつたのか。あるいは前の前の前の前の前のことであつたのか。もしかすると夜に見るあの夢、あのいやらしい夢の中であつたのかもしれない。もし現実に捨てたのであれば口惜しくもあり当然腹も立つ。とにかくいやな気持ちになる。だから夢の中のことだったということにしよう。彼は右手で棍棒を肩にかつぎ、左手で若い女を引きずりながらそう決断する。

洞窟のある岩山に近づくにつれ、彼は次第に悪い予感を覚えはじめた。死ぬというほどのことではないが、非常に鬱陶しい目に遭いそうな気がする。しかしそれは自分で回避できる種類のいやな目のようだ。なんでもないなんでもないと思ひながら彼は女をかつぎあげて岩の数段をのぼり、「齒ぬけ」の臭気がこもっている洞窟に入った。たちまち悪い予感が形をとって彼

の前にあらわれた。それは「齒ぬけ」の形をしていた。

彼がかついでいる若い女を見て「齒ぬけ」はわめきはじめた。何を言っているのか彼にはわからない。だが「齒ぬけ」は、実は自分だけのことばで喋っているのだ。今まで、自分で勝手にことばを作り、何度も同じことばをくり返し、それによって彼に自分のことばを憶えさせ、優位に立ち、それによってほとんど洞窟の外へ出られないこの時代の女としてのせめてもの生甲斐を見出そうとしてきたのだったが、彼はまるっきりことばを憶えないのだ。彼の頭が特に悪いのではない。人間の個体の成長過程と同じであり、進化のこの段階まではあきらかに女性の方が頭はいいのである。それでも「齒ぬけ」がわめきながら時おり自分の口の中を指したり、彼が肩からおろして洞窟の床に寝かせた女を指したりすることによって、彼にも「齒ぬけ」の言わんとするところがどうやらわかってきた。

「あのソレこのあたいがこの前の前の前から腹の減ったことの気をして、ソノあんたが何かソレ食べる噛む齧るのみこむものでつかいであつかいのもの持って、行って戻って帰ってくるのを前の前の前からこのあたしのソノひとりのあたしで待つて待つて待つていたのに、あんたはアレこのソノそんな女のものかつかいで戻って持つて帰ってきて、アノこりゃマアいいこのどういうつもりの気であるのかこのわたしにわからないよ」

しかし彼には「齒ぬけ」の嫉妬の感情までは理解できない。せいぜい敵意が読みとれる程度の情緒しか持たぬからだ。「齒ぬけ」の主張することだけはどうにかわかったところで彼はす

っかり頭が疲れてしまい、気をまぎらせるためもう一度、気を失ったままの若い女を抱こうとした。

たちまち「歯ぬけ」の聲が、さらに高くはねあがる。女と交わる彼の耳もとで声を濁らせて罵声をあげ、彼の肩を押して若い女の腹の上から落そうとしたりなどする。せっかく洞窟の中で外敵に邪魔されることなくゆっくり楽しもうとしているのに、うるさいやつだとは思うが、その程度のいやがらせによる苛立ちで萎えてしまうほどの繊細な神経を彼は持たない。それどころか、何故か彼にはわからぬものの「歯ぬけ」が傍らで嫉妬しながら見ていることによっていつもより密度の濃い快感を伴いながら彼は射精した。

さすがに空腹を、彼は自覚した。

洞窟の壁に凭れて、彼はぼんやりと食うことを夢見る。魚が食べたい、と彼は思う。川へ魚を獲りに行こう。彼の眼の前ではまだ「歯ぬけ」が彼を罵っている。何やら叫びながら若い女を指して腰を動かし、自分を指して腰を動かしている。今若い女にしたことを自分にもせよと要求しているらしいことは彼にもわかる。しかしそれは無理というものだ。この若い女ともう一度しようという気すら失せているというのに。

彼は立ちあがった。洞窟を出ようとしたが、またしても「歯ぬけ」が前に立ちふさがって何やらわめき立てる。川へ行って魚をとってきてやると言えば通してくれるだろう。しかしこの時代、「川」などという高度な名詞はない。かろうじて「水」とか「魚」とかいうことばだけ

